



遠く伊勢の海が広がる温暖後、尾張の国知多郡
平島村に享保十三年（一七二八）六月、平洲
先生は生まれた。

通称を甚三郎といい、八歳のときから隣村加
家村の観音寺の寺子屋に通い始めた。



通称を甚三郎といい、八歳のときから隣村加
家村の観音寺の寺子屋に通い始めた。



寺僧に、「人の上に足を垂れるとは何事か」と
言われ、「学問の上でもこうなってみせる」とい
いかえした、という。



名古屋の外科医加藤于周のもとに身を寄せ、五
年間、儒学をはじめ、手当たり次第に書物を
読みあさった。



寛保三年（一七四三）十六歳のとき、さらに
勉学を積み重ねるために師を求めて京都に
おもむく。





京都遊覧を兼ねて、わが子を訪ねた両親は、あまりにみすばらしい暮らしぶりに驚き五十兩を与えた。



京都に良師なしと知った甚三郎は、両親より
頂いた五十兩で書物を買い求め、二頭の馬に積
んで郷里へ帰る。



延享二年十八歳、淡淵先生の勧めで「詩経」研究のため、中国人から直接中国語を学ぼうとして、長崎へ出発する。



甚三郎は大阪、瀬戸内海、そして玄界灘を経て、長崎へ向かう。十一月十五日に長崎へ到着。



中国、オランダの學術、文化に直に觸れて、驚く。
生涯の友小河仲栗、飛鳥子靜の知遇を得て、
勉學に励む。



江戸へ出た平洲はやがて独立し、その記念に、
淡淵先生から生涯必要なものとして、茶碗をい
ただく。

宝暦三年、尾張の平洲宅にいた小河仲栗の妻
子を迎えに行く途中、遠州舞阪で良い竹材を
得、笛を作った。





淡淵先生没後、門人たちも平洲の下に移り、
宝暦三年末、柳原に移居し、塾名を「嚶鳴館」
と称する。



学者として名を知られるようになって、学ぶ
機会のない庶民を相手に、両国橋のたもとなど
で辻講釈をした。

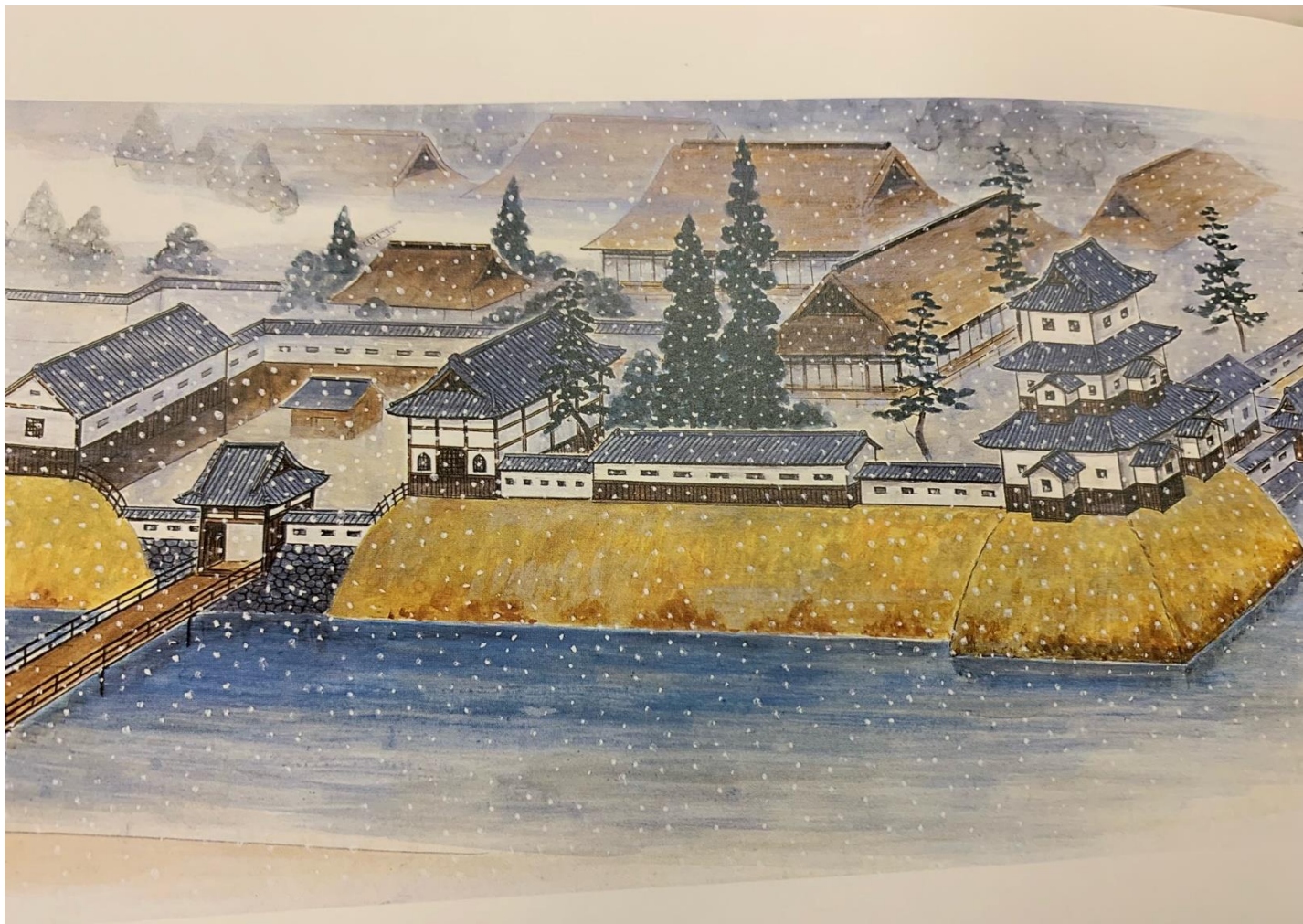
宝暦十年二月、江戸大火、書物家財を焼失する。が淡淵先生から贈られた愛用の茶碗と、舞阪の笛は残った。



明和元年（一七六四）三十七歳、請われて十四歳の上杉洛憲公、後の鷹山公の師となり、桜田邸で講義する。

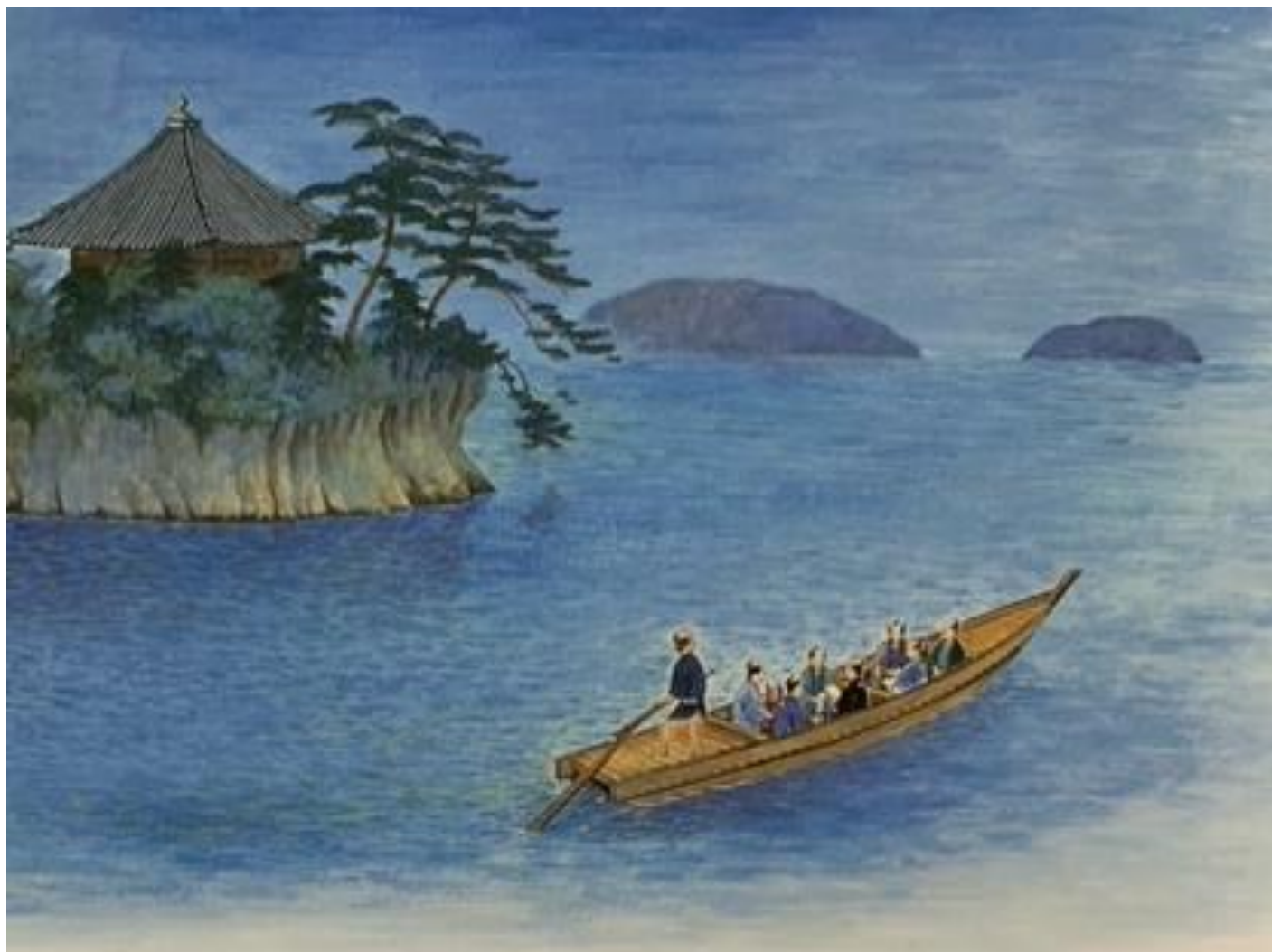


十七歳で出羽米沢藩主となった上杉鷹山公は、
明和六年十九歳で初めて国入りした。



当時の米沢藩は財政的に困窮していた。鷹山公は領内を巡視し、産業育成、人材養成登用を中心に積極的に国興しにあたった。





八月末、名勝地への思い絶ちがたく、松島に遊
覧、舟を浮かべて名月を愛でる。



安永五年（一七七六）四月、上杉鷹山公念願の
学館落成、平洲は「興讓館」と命名する。



安永九年（一七八〇）、五十三歳の平洲は尾張藩より御儒者として召される。

天明元年（一七八一）、尾張藩につかえた平洲
は、観音寺の隣、加家村の八柱神社へ灯籠を寄
進した。





天明三年四月二十一日、尾張藩校「明倫堂」
竣工。平洲、学館総裁となり、藩士の教育に当
たる。



藩校での教育の傍ら、廻村講話に励んだ。知多
郡横須賀村玉林寺では、千数百人の領民が集
まった。



天明三年、晩秋の大雨で被害にあつた庄内川、
大野木村の堤防工事には明倫堂の学生とともに
従事した。



寛政八年（一七九六）九月、六十九歳、米沢藩
の招きを受け、三たび米沢を訪れる。



上杉鷹山公は米沢郊外関根の地まで恩師、平
洲先生を出迎えた。現在、敬師の里としてその
名を残す。



普門院の境内に記念の椿を植えた。今も平洲
先生お手植えの椿として青々と繁っている。

享和元年（一八〇一）六月二十九日、細井平
洲没す。享年七十四、江戸浅草、浄土宗天嶽
院に葬られる





享和元年平洲先生誕生地、東海市荒尾町神明社境内にある平洲先生旧里碑前で、毎年五月二十九日、平洲祭が行われる。